

2016年3月11日 18:30～

供養コンシェルジュ協会 勉強会

ファミリーヒストリー記録社 代表 吉田富美子様

「家系図作成で見えてくること」 感想

私たちは誰しも、先祖から何を引き継いできたのか
自分は何者でどこからきたのかを、知りたいと思う気持ちがあるものです。
アレックス・ヘイリー「ルーツ」の作者

先日、供養コンシェルジュ協会の勉強会に参加しました。

「家系図作成で見えてくること」

家系図とは、どんな人が作るのだろうか？

先祖に偉い人がいる、有名人・・・。

由緒正しい、いいおうちの人がつくるものだと考えていました。

NHKで毎週楽しみにしている「ファミリーヒストリー」では
本人が知ることが出来ない、様々な人間模様や当時の記録が窺いしれて
調べればわかるものなのだ、と毎回感動、興味深く視聴しています。
そんな思いで楽しみにしていた会でした。

年齢を重ねるにつれ、早くに自分の両親を続けて失い、実の両親の人生さえきちんと
聞き取らず、別れてしまったという後悔の念がわいてきました。
家族だから、一緒にいるのが当たり前すぎて逆に何もたずねない。
若いころは、そばにいるおばあさんやおじいさんに、青春があって、様々な人生があっ
たなんて、想像をしたこともなかった。
1枚の遺影の向うには、たくさんの日々があり、生きてきた積み重ねがある。
そして今、せめて自分の子供には、先祖の名前やつながりを書き残したい。
自分たちはこういう血のつながりがあって、命をつないでいるんだよと、伝えたい。

私自身、同じ町内で父方・母方の親戚が多数おり、お正月、お盆、お彼岸と集まる機
会が多く、同じ学校に従姉妹やハトコもいました。
葬儀となったら、ものすごい数の親戚に会います。
親戚つながりで、生きた家系図を知らない間に見ていたのかもしれない。
いろいろ怒られたり、比べられていやだったけど、いい環境だったと今は思います。

大人になって、自分の子を連れてバスを待っていましたら、年配の女性が
こちらをしげしげと眺めてます。気付いてふっと見たら、私の祖母の妹でした。

「こんにちは、〇〇の娘の悦子です」と言いましたら

「やっぱり！あなたが連れてくる子が新田（母の実家の地名）系の顔をしているから、もしかしてと思って見ていたのよ」と言いました。

母方の兄弟はみな彫が深い顔をして、髪が茶色で、母は戦争中はイタリア人といじめられた、と言っていました。

私の娘に曾祖父、曾祖母の面影があるなんて、としみじみ感じた出来事でした。

家系図作成で見えてくること、の説明の中で

「時間的つながり」

「地理的つながり」

「生物的繋がり」

「社会的繋がり」

「歴史的な出来事に翻弄されてきた」

という内容がありましたが、まさに「生物的繋がり」と言えるエピソードだと思いました。DNAとは、すごいものです。

家系図作成の為に、直系先祖をたどって、戸籍謄本を取れることも初めて知りました。折をみて、トライしてみようと思います。

吉田先生のお話の中で、ご依頼を頂いて調べていたら、この勉強会の日付である3.11東日本大震災ですべて流されてしまい、調べることができないこともある、と聞きました。だから、わかるときに、調べておくこと。そういったお話を聞いた絶妙のタイミングだと感じました。

家系図を作ることは、自分の先祖や近いところでは、両親や兄弟の存在をきちんと見つけ、自分とのつながりを感じさせる、そういう優しい気持ちになれるのだという、再発見できた時間でもありました。その気持ちが亡くなった方への思慕、供養につながっていくのではないのでしょうか。